
だって好きだから。

榛 奈央

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

だって好きだから。

【Nコード】

N0598K

【作者名】

榛 奈央

【あらすじ】

好きなものについては誰だって熱くなりたい。伝えたい。
だって好きだから。

日常の中で気になったこと、好きなものについて考えたりする今日この頃を形にしました。

本のススメ

本棚の整理をした。

定期的に選定をして予選落ちになった本は売るなり人にあげてしまう。

そうでもしなければ家の壁を全て本棚にしたって足りなくなるのは分かっている。

物心ついた時から本が好きで漫画も小説も画集も写真集も詩集も好きなのだ。

出来るなら本は手元に置いて何度も読み返したい。当然の欲求だけれど本に埋もれて死んでしまう（本望かも知れない）。

ちなみに家も広くないので壁自体の面積は大してない。

本棚は持ち主の趣味や思考、その人が分かると言うが私の本棚の五分の一は有栖川有栖、恩田陸、北村薫、宮部みゆきなどのミステリー、さらに五分の一は羽海野チカ、末次由紀、CLAMPなどの少女漫画、ジブリの背景画集やはらぺこあむしの絵本、海や星空の写真集があと五分の一、残りはワンピースだ。

薄い写真アルバムがその中に時々紛れ込ませてある。

二十歳を超えてからはまだ良いが、化粧を覚え始めた高校生の頃の写真は恥ずかしくてせつかく厚化粧して写真に収まっているが今後も人目に晒す気はない。

未熟で背伸びばかりしている過去とは恥ずかしいものだ。

本棚には指定席がある。私はシート権とも呼ぶ。

シート権を持っている本は定期選定の予選には出場しない。

恥ずかしいが捨てる気になれないアルバムも致し方なくシート権を与えている。

シート権を与えられている本とは、わかりやすく言うと整理をしていてつい読み返してしまう本だ。（つまりアルバムもなんだかなだ言いながら読み返す時がある。）

今回も整理しながら、北村薫を久しく読んでいなかったな。と一通り読み返した。それから本屋に行ったら新シリーズが出ていた。新シリーズと言っても私が気づいていなかっただけで、六年も前に発行されていてすでに全三冊で完結していた。

抜かった、としか言いようがない。

意気揚々と帰って読み倒し、即シード権を与え今までの著作に並べた。

作品の舞台は昭和七年。語り手の花井英子令嬢とお抱え運転手ベツキーさんこと別宮みつ子さんが身近に起きる事件や謎を解く。

英子嬢は上流家庭のお嬢様で御学友の御公家様や華族様とは「ごきげんよう」「この方」と声を掛け合う。

ゆとり世代の自分は親近感が感じられない、などと思ったのは最初だけ。

英子嬢は十代半ばの娘さんならではの清潔さと正直さが魅力的で、何よりミステリーに相応しく好奇心が旺盛だった。

英子嬢の水晶玉の様に磨き抜かれた透明な視点で映し出された物語は、私に見たことも無い当時の銀座や軽井沢を見せてくれた。

北村薫とはこういう人なのだった、と思わせる読後感だった。

実は私に北村薫を薦めたのは有栖川有栖だ（と私は思っている）。

北村薫は本格原理主義者、日本ミステリー界の巨匠であり尊敬して止まないと言うようなことをあとがきで書いていた。

それは読まなくてはい！と思い本屋に行つて見つけたのがスキップ、ターン、リセットの「時と人」三部作だった。

小学生の自分の感想としては面白くなかった。

ファンタジックな内容にも思えたけれど私の中ではホラーに分類された。

花も恥じらう高校生の乙女がいきなり自分と同じ年の娘がいる主婦に「スキップ」してしまうなんて恐ろしい。

ターンに至っては読んでいる最中主人公になった悪夢にうなされた。誰もいなくなつた真夏の一日を何度も繰り返すのだ。

気が狂ってしまう。

ここで心が折れてリセットは読もうとしなかった。
有栖川有栖の著書はどれも気に入っていたので

「好みが合うと思うっていたけれど勘違いだったのね。」

勝手にがっかりしたりした。

そこに今度は宮部みゆきが北村薫こそは、と言うではないか。

「どこかのだれかもそんなこと言っていたけれどね。あなたまでそんなこと言うなんて。」

拗ねたりもしたが傾倒している作家の勧める本とは極めて魅力的である。

誘惑に勝てず探して見つけたのが覆面作家シリーズだった。「覆面作家はふたりいる」から始まるこちらも三部作だ。

世田谷の豪邸に住む美貌のお嬢様は抜群の推理力と観察眼で推理作家だけでなく探偵までもこなしてしまう。

困ったことに（これが醍醐味なのだが）ひとつビョーキがあつて、逆内弁慶なのだ。

家にいる時は内気で思慮深く謎を解く借りてきたネコさんのようなお嬢様が、一歩門の外に出ると大胆、活発に謎を竹割にするサーベルタイガーに豹変してしまう。

おやまあ。こんな人だったのね。

私にとつては北村薫の印象こそ豹変した。

コメディータッチのほのぼのミステリーは面白いなんてものじゃなかった。

その後に読んだ落語家円紫さんとわたしシリーズを読んだ時には落語家はどうかと思ったらなるのだろうかと考えさせられた。

私が子供だったばかりに有栖川有栖にはひどいことを言ってしまったが、今となつては大ファンなのだ。ここは子供のしたことと思つて快く許して欲しいと思う。

「時と人」三部作も高校生になつて読み直した。面白いと感じたし、静かに胸が熱くなった。（悪夢も見たが）

気づけば本棚の指定席にある本は小学生の時から今も面白いと感じる本が並んでいる。

昔読んだ本が今も面白く感じるというのは嬉しいことだ。昔とは違った気持ち、視点で見ても面白いのだ。

なにより比べられるほど昔から本を読んでいたこと、読み続けられる名作に会えていたことが嬉しい。

本屋に行くとまだこんなに読んでいない本があるのかといつも思う（なにせ北村薫の新作の前を六年も通り過ぎていた）。

早く読みたい、もっと読みたいと思うが読み尽くすことはないだろう。

故に、私の本棚は未完成だ。

未熟さや背伸びは恥ずかしいものだが未完成は私にとって清々しい。

未完成とは間違いや無知ではなく、探求心であり向上心だ。
なるほど、本棚とは人そのものだ。

少女A（前書き）

ちびまるこちゃんのまるちゃんとたまちゃんは今でも仲良しだそうです

私が小学生の時仲が良かった子はもう十年くらい顔を見ていません。今ならまた友達になれるかな、なんて思ったりするのです。

少女A

あやや、ゆうこりん、まっちゃん、はまちゃん。

あだ名を聞いたただけであ、あの人ねと連想してもらえるあだ名を持つ人が羨ましい。

私の名字も名前も日本全国どこに誰に聞いてもよくあるね、と言われる自信がある。それでも私にはあだ名が無い。

ちゃん付け、さん付け、呼び捨てのどれかである。

あだ名で呼びにくい、きっと私はそういう人間なのだろうと思う。私の友人に「そういう人」がいた。

私は転校が多く、その人と出会ったのは小学六年の時に転入した学校だった。

今は個人情報保護が厳しくいわれる時代だ。彼女の名前は仮に少女Aとしよう。

とも思ったが、犯罪者扱いしているようで悪いので鳥山さんとしよう。そう言う雰囲気の名前だった。

鳥山さんは真面目で、同じ小学生なのに落ち着いていて静かだった。社交的ではなく最初の印象は怖い、神経質そう、だった。

実際彼女は神経質だったし普段から口数が多い方では無い反動なのか強烈な皮肉や毒を吐くことがあった。

きらりと眼鏡を光らせて、休み時間には机にかじりついて本を読んだり絵を描いていることが多かった。漫画家を夢見る同世代の子達が描くような瞳の大きな少女ではなく、百合や猫なんかの植物や動物だ。

特別上手なものではなかったけれど丁寧に描かれていた。何か見本を見るでもなく、そのくせなぞるように強い筆跡で描くので私はついいつも見入って側にいた。鬱陶しかっただろう。私は彼女を特別褒めるでもなく静かに見つめていた。集中している時の鳥山さんは普段でさえ取っつきにくいのに、それに輪をかけて近寄らないで

よオーラを出す。

私は近寄りがたくも感じているのに、そんな懸命でまっすぐな鳥山さんを見るのが好きだった。

彼女にまともに話しかけられた時の言葉を実は覚えている。

「何読んでるの」

自然に何気なく（実際何気ない）言葉をかけられたが、私は鳥山さんに認められた気がして読んでいた本がどれだけ面白いか饒舌に語った（まだ読み終わっていないのに）。

小学生の当時、他の友達とは出来ないようなちよつとマニアックな本を勧め合ったり、感想を言い合ったり出来た。当時ミュシャの絵や山田かぼすの詩について語り合えたのは彼女だけだった。

中島みゆきに心酔しだしたのはどちらが先か。たぶんどちらかが好きだと言ったら実は私もなの、と言う展開だった。とにかく好みがあったのだ。

私はへらへら笑ってどちらかというと賑やかに騒いでいるタイプだったから、実は鳥山さんの嫌いな人間の部類に入っていた。

それでも仲良く出来ていたのは私が他の友達に言いこそしないけれど、鳥山さんと同じものが好きなことから私という本質を見ていてくれたからだと思う。

だからなのか、どんなに仲良くなっても鳥山さんは私をあだ名では呼ばなかった。その頃共に仲良くしていた友達はみんな私を呼び捨てにしていたが、鳥山さんは私の名前にさんを付けて呼んでいた。彼女の私に対する敬意と親愛が込められている気がして私はそう呼ばれることを喜んでいた。

私がそう言う人間なのだと彼女には分かったのだろうし、私も彼女を鳥山さんとしかなわなかった。

お互いの事を深く分かりあっているつもりでいた。

それを確かめるために私は彼女にひとつの質問をした。

今考えると卑怯な質問だ。

「将来何になりたいの」

小学六年である。無謀な夢だつて語つて許される年だ。

けれど私も鳥山さんも他のクラスメイトに比べれば早熟でプライドが高かった。

無謀な夢なんて語るのは格好が悪いと思つていたし、地に足が着いた大人に早くなりたいと思つていた。少なくとも私はそうだった。鳥山さんがなんて答えるか、質問なんかしなくても私には分かつていた。

小説家になりたいんだ。

鳥山さんは人付き合いが上手ではなかったし、作家を尊敬し、自分の世界観を大切にしていた。どんな職業より作家は魅力的に感じている。

私は分かつていた。けれどそれは「夢」だ。道のりは果てしない。プライドの高い鳥山さんは他の友達に対しては「夢」を教えたりしない。馬鹿にされたり穢されたくないと思つているはずだから。

知つていて私は尋ねた。鳥山さんを試したのだ。

彼女は言つた。

「本を読むのが好きだから、自分の読みたいと思うようなものは自分で描いていきたいと思つているの。私は物書きになりたいのよ。」人になつかない野良猫が見せた腹だった。

言わせた。弱みを見させた。誰にも見せないであろう弱みを、私の私に！

気持ちを高ぶらせる反面、私はショックも感じていた。

彼女の夢は小説家になることではなかった。

自分の読みたいものを自分で描くことなのだ。物書きはその結果に過ぎない。

鳥山さんはそんなところにいるんだ。小説家になりたいという浮ついた夢ではなくただ書きたい、読みたいと思う世界の中に。

深く理解し合つて、同じ世界を見つめているような氣になつていた私には衝撃だった。

鳥山さんは照れているのか、きっと答えが分かっているだろうに

同じ質問を私に返してきた。

同じだよ。なんて言えなかった。

私は彼女のいる世界にはほど遠い、子供じみた夢の中にいることに気づかされた。

将来の夢はどれにしようか。そう考えた時、作家という「職業」に憧れていたのは自分だ。憧れと夢は似ているようで違う。

自分は作家と言うものに憧れているだけじゃない！

今考えればそれで良かった。だってまだ十二歳だったんだから。けれど目の前に突きつけられた眩しい才覚に私はみすばらしい自分の姿が顕わにされたような、研ぎ澄まされた切っ先で斬りつけられたような気すらして、惨めで仕方なかった。

「私は本は好きだけど才能なんかないから。読む専門！」

努めて明るく、にこやかに悩みなんか無く悟りを開いているかのように言ったつもりだった。空元気だと思われていればまだ良いけれど意地を張って大人ぶったことに鳥山さんは気づいていたかもしれない。

それからも親しくしていたけれど、それまでのように小説や絵、詩の感想など彼女に言えなくなってしまった。

彼女にそんなことを言う自分は滑稽だと思っただし、あの日斬りつけられた心（というよりはプライドか）の傷は塞がる気配もなく痛みを訴えていて正直顔も見なくなかった。

かつては尊敬と親愛を込めて鳥山さんと呼んでいたはずが、次第に心の距離そのままに呼ぶさん付けになり私が引越したことで本当に顔など見ない仲になってしまった。

やはり、彼女は少女Aで良いかも知れない。

私に致命傷を与えた。

忘れることの出来ない、才能という刃を振るう罪深い少女。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0598k/>

だって好きだから。

2010年10月22日00時23分発行